使い魔がハンター！？

あいうえお

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
使い魔がハンター！？

【Ｎコード】
Ｎ７０５１Ｘ

【作者名】
あいうえお

【あらすじ】
異世界“ハルケギニア”のトリステイン魔法学院。そこで行われた使い魔召喚の儀式により、ゴンとキルアが召喚されてしまった！？「もしかしてあの鏡のせい…！？」「だから言っただろ！　あんな怪しい鏡に触るなって！」「ちょっとあんたたち！　人の話聞いてるの！？」もしもルイズがゴンとキルアを召喚してしまったら？というＩＦストーリーです。

No．0　プロフィール（前書き）

新しく書き始めました！

自分はゴンとキルアのコンビが大好きです！←誰も聞いてないっ！

ただでさえ更新遅いのに…（（〇＝殴っ！

そんなアホな自分ですがこれからもよろしくお願いします！（／Д、）・。・

No．０　プロフィール

ゴン＝フリークス

性別：男

年齢：１５歳

誕生日：５月５日

血液型：Ｂ型

系統：強化系

ハンターハンターの主人公にして、この作品の主人公。

性格は原作と変わっておらず、好奇心旺盛で単純な性格。直情的な面もあるが、冷静な面もあり、たまに核心を突く。興味のあることには善悪の区別をつけないという純粋さをもっているが、それが同時にゴンの危ういところである。また、難しい事を考えると頭がショートしてしまう。

自然の中で育ったことで、動物と心を通い合わす事が出来る。

念能力

ジャジャン拳

その名の通りじゃんけんに見立てたゴンの技

グー：強化系の技。オーラを込めた右ストレートを放つ。ゴンが強化系能力者ということもあり、３種類の中では圧倒的に威力が高い。

チー：変化系の技。手先でオーラを刃状に変化させ、対象を切断する。だが、ゴンが強化系であるため、威力は高くない。

パー：放出系の技。掌からオーラの塊を飛ばす。チーと同じで威力は高くない。

キルア＝ゾルディック

性別：男

年齢：１５歳

誕生日：7月7日

血液型：Ａ型

系統：変化系

ハンターハンターのメインキャラ。この作品のもう一人の主人公。伝説の暗殺者一家、ゾルディック家の三男で、ゾルディック家随一の才能を持つ。

幼い頃の経験や特殊な生育環境からか、何処か達観した考えを持っている。仲間には細かな気遣いを見せるが、敵と見なした相手には非情に接することもある。頭脳明晰、冷静沈着で慎重に物事を進めていくタイプ。だが、時には大胆に行く事も。

念能力

オーラを電気に変える事ができる。

雷掌（イズツシ）：両手からスタンガンのように高圧電流を発生させる。敵を感電させ、一時的に動きを封じる。

落雷（ナルカミ）：敵の上方に跳び、両手から落雷のように高圧電流を敵の頭上に落とす。

神速（カンムル）：自身の肉体に電気の負荷を掛け、潜在能力の限界すら超越する動きを強制する技。自分の意思で肉体を操作する電光石化と、相手の動きに感応して自動的に肉体を働かせる疾風迅雷に別けられる。

Ｎｏ．０　プロフィール（後書き）

次回から本格的に更新していきます！

これからも頑張っていこうと思います！（≧▽≦）

No．1　プロローグ（前書き）

やっと最初のお話です！

超絶的な駄文です！しかも自分の頭の悪さがもろ出てます（／Д、）

・。・

おまけに全然進んでいないという…（（〇＝殴っ！

スイマセンm（＿＿）m

自分なりに精一杯頑張りました。

No．１　プロローグ

とある洞窟の入り口、今ここに、ツンツンに立った緑がかった黒髪の少年と、さらさらした綺麗な銀髪の少年、ゴンとキルアがいた。

二人は、その洞窟にハンターとして来ていた。

財宝（トレジャー）ハンター、賞金首（ブラックリスト）ハンター、美食（グルメ）ハンター…、ハンターと言っても数多く存在し、これらは幾重にも存在する選択肢の一つ、どれに重点を置くかによってその俗称で呼ばれることとなるのだ。

ゴンとキルアには、まだどのハンターを目指すかという事は決まっていない。今回の目的は財宝（トレジャー）ハンターとしてであった。選んだ理由としては腕試しも兼ねての事である。

「やっと着いた…。ここが、その洞窟だね」

「ハンターサイトの情報だ。間違いねぇよ」

ゴンとキルアが言葉を交わす。二人の５０メートルほど先に龍の形をした洞窟があった。

「それにしても、凄い生き物ばっかりだったよね。この辺り」

「場所はっきり分かってて所得難易度Ａランクだからな…。多分、中はもっと凄いぜ？」

二人は台詞に反して楽しそうである。

そして二人が洞窟に足を勧め出した、まさにその瞬間、目の前に黄緑色に輝く楕円型の鏡のようなものが出現した。

刹那、ゴンとキルアは凝を使用、臨戦態勢に入る。

「ねぇ！　この鏡！」

「ああ」

（どういうことだ？　何も見えない…）

凝、それはオーラを体の一部に集めて増幅させる技術である。そのオーラを目に集めれば、相手のオーラも見る事もできる。それゆえに、未知の敵と対峙した時の常套手段ともされているのだ。

こういう特異な事態が起これば、まずは凝を使う。二人の凝の速度はまさに一瞬、経験が成せる業である。

（一番可能性が高いのは具現化系能力！　だけどそれならオーラは見える筈…！　これは一体…）

（オーラが全く感じられないし、生きてる感じも全くしない。ていうことはこれ、本当にただの鏡？　でも急に目の前に現れたよね…？　確かめるにはやっぱり…）

「ゴン。とりあえずその怪しい鏡には触るな、っておい！」

「え？」

そうキルアが言った時、ゴンはすでに鏡に触れていた。

思慮深さにかけるがその行為は概ね正しい。凝でも見切れないなら、実際にふれてみるしかない。しかもこの鏡にはオーラが全く感じられないのだから。

だが今回は、慎重に物事を見るキルアの方が正しかったと言える。

ゴンが鏡に触れた瞬間、鏡は凄い勢いでゴンを吸い込んでいった。

「うわぁぁあ！」

「ゴン！」

キルアはゴンの腕を掴み、思いっ切り引っ張る。だが、それを鏡の吸引力は上回っていた。

（ありえねぇ！　何だこの力！）

全てのオーラを足に集中させる。だが、それでも鏡の方が力が上である。

「キルア！　手を離して！　このままじゃ！」

「バカ言うな！」

キルアがそう言った瞬間、鏡の力は更に強くなる。

そして、二人の姿は鏡と共に消えた。

所変わって、ここはトリステイン魔法学院。今、ここでは“サモン・サーヴァント”と言われる使い魔召喚の儀式が行われていた。

次々と行われていく儀式。周りには幾多の生き物がたむろしていた。

蛇やフクロウや猫、中には火を吐く大きな赤いトカゲや、宙に浮く紫色の巨大な目ん玉、青いドラゴンすらもいる。

そして遂に最後の一人の番までやってきた。

「ゼロのルイズかよ…」

「何呼び出すんだ？」

「呼び出せっこないでしょ。また爆発してお終いよ」

まわりからヒソヒソと言葉があふれる。その視線の先には桃色がかったブランドの髪の少女、ルイズがいた。

（お願い…！）

周りの言葉を無視し、サモン・サーヴァントを行おうとするルイズ。手に握る小さな杖にギュッと力が入る。

「宇宙の果てのどこかにいる私の僕よ」

『は！？』

「なーにあの呪文？」

「ま、まあ独自性はあるな」

ルイズは周りからの突っ込みも無視し、儀式を続ける。

「神聖で、美しく、そして強力な使い魔よ。私は心より求め訴えるわ、我が導きに答えなさい！」

そう言って杖を振るルイズ。

その瞬間、ドカンッ！と爆発が起こった。

「げほげほ、やっぱこうきたか…」

「げほげほ、大丈夫かいモンモランシー」

「ねえ…、あれを見て…」

モンモランシーと呼ばれた金髪の巻き髪の少女が指をさす。白い爆煙が晴れて行き、一同はその先に視線を向ける。そこにいたのはルイズと気絶している二人の人間。一人はツンツンに立った黒い髪の少年、もう一人はさらさらとした銀髪の少年だった。

「に、人間？」

「あの格好どう見ても平民だぜ」

「あ、ああ平民だね、間違いなく」

「それに二人もいるぞ…」

それは前代未聞の出来事であるため、皆驚きを隠せない。人の使い魔なんて聞いた事がなかったのだ。しかも相手は平民である。

「こ、こんなのが、神聖で、美しく…、そして強力な…」

ショックと憤りで強張るルイズの顔。

こうしてゴン＝フリークスとキルア＝ゾルディックが異世界に召喚された。

No．1　プロローグ（後書き）

こんな駄文に付き合っていただきありがとうございます！（≧▽≦）

これからも頑張っていこうと思います！

あと、ゴンとキルアは、原作よりかなり強い設定です。修業はちゃんとしてきています。

あと、誤字や矛盾点、おかしなところなどございましたら、遠慮なくお願いします。

No．2　異世界（前書き）

早くできたので投稿します！

これからもこれぐらい早く投稿できればなぁ（（〇＝殴っ！

やはり駄文です！しかも無理やりです！

申し訳ありません！m（＿＿）m

No. 2　異世界

「ねえ、あんた達誰？」

（この声は？）

突然頭の中に響き渡って来る女性の声、ゴンとキルアは意識を取りもどした。

「う…キルア…無事！」

「俺は大丈夫、ゴンは…？」

そう言葉を交わし合う二人。目を開けた二人の目の前には見たことのない服を着た桃色の髪をした少女がいた。

そして二人は現状を把握するため周りを見渡した。

とりあえず、周りの人からは敵意も感じられず、念を使っている様子もない。その点は問題ないが、一体ここがどこなのか、それが分からなかった。

周り一面に広がるは草原と遠くに見える石造りの大きな城。二人ともこんな場所に見覚えはない。

そんな二人の態度に、ルイズは怒りをあらわにする。

「ねえ！　あんた達が誰かって聞いてんの！？」

その言動にムカっときたキルア。
簡単に教えるつもりはないね、と言おとしたが、それよりも前にゴンが質問に答えた。
「え、あ！　ごめん！　俺はゴン！　よろしく！」
「（ったく）俺はキルア」
「どこの平民？」
（へ、平民？）
（いきなりなんだ？　こいつ…？）
二人の心の中で疑問が重なる。いきなり平民扱いされれば、それは当然だろう。
（にしても、ここいったいどこなんだろう…）
テレビの魔法使いのような黒いマントをつけている人たちや、見たことのない生き物たち。それはまるでファンタジーの舞台であった。
「ふふふ、さすがゼロのルイズ、まさか“サモン・サーヴァント”で平民を呼び出すなんてね」
赤い髪で褐色の肌と豊満な胸をした女性、キュルケがルイズに近づきながらそう言うと、周りのみんなは笑い声をあげた。
「ちょ、ちょっと間違っただけよ！」

「間違いって、ルイズはいっつもそうじゃん」

「さすが、ゼロのルイズ。期待を裏切らない結果だなー。」

その言葉で周りの生徒たちの笑い声が更に大きくなる。ルイズはどんどん不機嫌になっていった。

「ミスタ・コルベール！」

「なんだね。ミス・ヴァリエール」

「もう一度召喚させてください！」

「それはダメだ」

「何故ですか？」

「この儀式はメイジとして一生を決める大事なもの。やり直すなど儀式そのものに対する冒涜ですぞ。君が好むと好まざると彼は君の使い魔に決まったのです。」

「でも！　平民を使い魔にするなんて聞いたことがありません！」

（使い魔がどうとかって、何言ってんだこいつら？）

キルアはその会話に耳を傾ける。そんなキルアをゴンがトントンと叩いた。

「やっぱり、俺たちあの鏡に吸い込まれたんだよね」

「十中八九、それは間違いないな。…ったくだから言ったじゃん！？　あんな怪しい鏡に触んなって！」

「ごめん。でもあの鏡、何も感じなかったよ？」

「だからって不用意に触れる奴があるかよ！」

そう答えるが、キルアもゴンの言い分が正しい事は分かっていた。そもそもあの場面で触れる触れないの明確な答えはないのだ。

（確かにゴンの言う通り…。そしてそれが一番問題なんだ…。ゴンが鏡に触れた瞬間、凄い力で吸い込んで、気がついたらこの場所、おそらく強制ワープ。それだけの能力ならオーラは間違いなく見えるはずだ。それに何故ここなのか？　それも分からない。こいつの能力か…？）

キルアは目の前でコルベールと呼ばれた禿げた男性と言い争っているルイズを見る。先ほど確かに召喚したと口にした。つまりここにゴンとキルアを呼んだのはルイズだと解釈してもおかしくない。

だが、あり得ない、キルアは確信した。単純にルイズにアレだけの能力を扱えるほどのレベルはないと判断してのことであるが、念と触れあい、様々な念使いと出会った事のある経験が、その考えを確信へと導いた。

そもそもキルアから見たルイズは、念を知ってるかどうかすら怪しいレベルである。

「とりあえず、ここがどこか分からないとね？」

「ああ、そのためにはまず情報収集しないとな」

「あのピンクの髪の子に聞いてみる？」

「俺はヤダぜ。あの女感じ悪いし。聞くなら別に誰でもいいだろ？」

ヒソヒソと会話するゴンとキルア。そんな二人に、ルイズは近づいて怒鳴った。

「ちょっとあんた達ヒソヒソとうるさいわよ！」

そう言ったルイズはさらに言葉を続ける。

「感謝しなさいよね。貴族にこんなことされるなんて、普通は一生ないんだから」

そしてルイズは杖を振りあげた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者たちに祝福を与え、我の使い魔となせ」

ルイズはしゃがみとゴンの顔を左手で抑えた。

「あの、なに？」

「いいからじっとしてなさい！」

ルイズはそう言い、そのままゴンに顔を近づけて行く。女性経験は

それなりにあるゴンでも、突然のこの行動には戸惑いを隠せず、この行為が一体何をしようとしているのかを理解したキルアは二人に近づいて叫んだ。

「おい！　何してんだよ！？」

「使い魔召喚の儀式よ。次の授業まで時間がないから早く済ませないといけないの。これが終わった次はあんたとよ。私だってあんた達平民とこんな事するなんてこれ以上ない屈辱なんだから！　平民の分際でこれ以上私を困らせないで！」

その言動にカチンときたキルア。瞬間、キルアは周りの人たちの視線から消えた。

そして再び視認できた時、キルアはゴンの腕を掴んでいた。

「行くぞゴン！」

その声を周りの人たちが確認したのとほぼ同時、ルイズがスタンとその場に倒れこむ。

そして走り始めるゴンとキルア。安全を確かめるため、コルベールはいち早くルイズのもとに近づく。

（気絶している…！）

「誰か！　ミス・ヴァリエールを医務室へ！」

コルベールが叫ぶ。その瞬間、周りの生徒たちは慌てふためきだす。一体何が起こったのか？たった一人を除き、全ての生徒が理解でき

ていなかった。
そしてコルベールは走り去る二人にも叫んだ。
「君たち二人も待ちたまえ！」
だが、二人は聞く耳も持たずに走り去った。

「ねぇキルア！　やりすぎじゃない？」
「仕方ねぇだろ。あいつ、一々嫌な言い方してくるし、それにあんな儀式に付き合ってられねぇっつーの！　キスしようとしたんだぜ、キスしようと！　お前だって絶対したくないだろ？」
あのまま行けば、いつまでたっても儀式は終わらなかったであろう。キルアはそれも理解しての行動だった。あのまま行ってもルイズは儀式をやめようとはしない。だがゴンとしても、よく分からない儀式でキスなんてするはずがない。それは容易に予想がついた。
「うん。それはそうだけど。…でも情報、何も聞けなかったね」
「なら自分たちで探すだけだ」
キルアが前方を指差す、そこには石造りの大きな城があった。
「とりあえず、あの中からだね」

ゴンの言葉にキルアは頷いた。

突然の事態に慌てふためきだす生徒たち、コルベールはその事態の収拾につとめていた。

「みなさん！　落ち着いて！」

それを遠くから見つめる二つの影。その慌てた生徒の一人であるキュルケが、隣に立つ小柄な青い髪の少女に尋ねた。

「ルイズ…、さっき何されたの？　タバサ、あなた何か見えた？」

タバサと呼ばれた少女は一度頷き、静かに答えた。

「おそらく、手刀…」

「は！？　手刀ですって！？」

驚きの声を上げるキュルケに、タバサはコクっと頷いて返す。それから、気絶し運ばれているルイズに視線を向けた。

（さっきの動き、辛うじてしか見えなかった…）

タバサが視認できたのは影だけである。その影がルイズの横を通り、姿を視認できるようになった時にはゴンの腕を握っていた。

この時、タバサはこの間に何があったのかをまだ理解していなかった。そしてキルアが「行くぞゴン！」と言った瞬間、ルイズが倒れる。

死んではいないし、外傷も見当たらない。だが、何もなくルイズが倒れるわけがない。そこでやっと、あの一瞬でキルアが何をしたのかを理解できた。

気絶させた、あの刹那で…。

そして、それが可能なのは手刀しかなかった。

（あの銀髪の人只者じゃない。もう一人の黒い髪の人は分からないけど…、おそらくほぼ同等の実力…）

一体何者なのか？タバサの頭にその疑惑が色濃く刻まれた。

No．2　異世界（後書き）

この作品における、ゴンとキルアの戦闘力はかなり高いです。たいていの相手には無双できます！（（〇＝殴っ！

ゴンとキルアに関しては、キルアの方がゴンよりも若干強い設定で行きます。

誤字や脱字、矛盾点、おかしなところがございましたら、お願いします！

そう言ったところは常時訂正していこうと思います！

No．3　魔法（前書き）

今回はゴンとキルアが魔法について知ります！

一部戦闘描写がありますが、本当に駄文です！（（〇＝殴っ！

しかも、作者の計画性の無さが凄まじく露見しております！m（（

）m

……申し訳ありません

No. 3　魔法

目の前に見える大きな城のような建物、その周りを取り囲むのは五角形の外壁であり、その角にそれぞれ高い塔がそびえ立っていた。

その場所“トリステイン魔法学院”を目指すゴンとキルア。常人には判別できない距離だが、二人は前方の外壁に門を発見、そしてそこに立つ二人の衛兵に視線を向けた。

「キルア！　見張りがいるよ！」

「とりあえず！　見つからねーようにな！」

そして二人は真っ直ぐ進んできた足取りを変え、衛兵に見つからないように城を囲む外壁を目指した。

そして外壁までたどり着いたゴンとキルア。ゴンはキルアに尋ねた。

「俺は正面突破の方が良いと思うけど、キルアどっちが良いと思う？」

選択肢は二つ、この外壁を飛び越えるか正面突破かである。

正面突破を選ぶならば間違いなく面倒な事になる。侵入者として扱われれば情報収集が難しくなるからだ。外壁の外からでもこの中に誰かいる事は理解できる。どれだけ静かに見張りを気絶させても、中の衛兵に気づかれるだろう。

だからと言って、この外壁を安易に飛び越えるのもまずい。

この外壁は常人にとっては確かに高いが、ゴンとキルアにとっては飛び越えられない高さと言うわけではない。というより、念を使いこなせるものなら、大抵の人間が飛び越す事ができるだろう。

これだけの建物でありながら、何故このような不備があるのか？その可能性は二つしかなかった。

罠か念を知らないかである。凝で見ても何も見えないが、少しでも危険のある事は避けたい。なにより二人をここに呼び寄せた鏡もこの場所に関係がある可能性が高い。念を知らない可能性は低いと判断した。

「俺も正面突破だ。もし罠だったらそこで終了だけど、あいつらなら十分対処できるしな」

「よし、決まりだね」

そして二人は“絶”を使用、自身の気配を断って移動を始めた。

そして二人は門の近くの茂みに身を潜めた。

そしてキルアがゴンに目で合図を送る。それにゴンが頷いたのを確認し、キルアは一瞬で見張りの衛兵の傍まで移動、首に手刀を落とす。

唯一の入口である門、一番警戒しなければならない場所であるため、当然中にいる衛兵の一部は異変に気づく。

（倒れた…！）

そう認識したのとほぼ同時に、衛兵は叫び声を上げた。

「侵入者だ！」

それの叫び声に反応して、衛兵たちは門の方を向く。そこには二人の少年が立っていた。

「行くよ。キルア」

「ああ」

数はおよそ２０。それだけの数の衛兵達が、たった二人の少年二人に一斉に襲いかかる。それはいささかシュールな光景であった。

だが所詮はただの衛兵、二人の相手になるレベルではなかった。

トリステイン魔法学院本塔の最上階、そこに位置する学院長室に、白く長いひげを生やした老人が肘を突いて自身の髭を撫でていた。

今、学院長オールド・オスマンは暇で時間を持て余していた。

ちょうどその時、扉が勢いよく開かれる。そして一人の教師が中に

入り、叫んだ。

「侵入者です！」

「侵入者！？　ここにですか！？」

この部屋に存在するもう一つの人影、緑色の髪の女性がそう言った。

彼女はミス・ロングビル。オスマンの秘書を務める女性である。

「侵入者は二人！　ミスタ・コルベールの証言では、ミス・ヴァリエールが召喚した使い魔だそうです！　広場の衛兵は全滅し、応援で駆けつけた衛兵も成すすべなくやられています。おそらく『メイジ殺し』の類です」

「メイジ殺しか…」

「生徒たちには教室を出ないよう厳重報告。今、ミスタ・ギトーが賊のもとに向かっています！」

「ふむ…、良い報告ではないが、スクエアクラスのメイジならば時間の問題じゃろ…」

オスマンがそう言う。それはこの世界の理屈では正しい。スクエアクラス、それはこの世界では最上位のクラスのメイジであるということだ。いくら強いと言っても、所詮は平民。貴族の、それもエリートには勝てない。

だが、それはこの世界の常識に過ぎない。この時オスマンは完全にはかり違えていた。

渡り廊下を走るゴンとキルア。その時、二人は不振な視線に気づく。二人は構えを取り、外の広場に視線を向ける。そこには黒いマントを纏った長髪の男が立っていた。

「全く、衛兵と言っても所詮は平民か…、こんな子供に手こずり追って」

先ほどまで相手にしていた衛兵達とは違う。それは身なりで判断出来た。一番近いのは先ほど出会ったコルベールである。

「まさか、貴様らのような子供が侵入者だとはな…、我々も舐められたものだ」

その男性は握りしめた杖を高く上げる。その姿はまるで魔法使いが魔法を扱う様に酷似していた。

「ゴン！　気をつけろよ！」

「うん！　分かってるよ！」

二人は“纏”“練”の応用技“堅”を使用、だが、目の前の男性は

変わったそぶりを見せない。

それが、何を意味するのか、容易に予想がついた。

念での戦闘は、主に“練”を維持して行うのが普通である。だが、目の前の黒髪の男はこちらが“練”を使用しても全く変わったそぶりを見せない。ド素人以前の問題であった。

あの杖にも何かある様には思えない。目の前の男の行動を不審に思う中、ゴンの耳に微かな声が聞こえてくる。

「ラナ・デル・ウィンデ…」

（？　今のは…？）

次の瞬間、長髪の男は杖を振り下ろす。

風の震えを感じ、二人は咄嗟に左右に飛んだ。渡り廊下の壁を砕き、自身達の真横を通り過ぎていく風の塊。それは明らかに常人の技ではなかった。

「ほう、不可視の風の槌、良く避けたな」

避けられことに驚いたものの、余裕綽々と言った口調で二人にそう告げる。それに対し、二人は回避できたもの、驚きは大きかった。

「キルア！　コレ！」

「ああ、間違いなく念じゃない！」

（一体どういう事！？　さっきのがあの人の念能力だとしても、オーラが何もみえないのはおかしい…）

（それにこっちが念を使っても全くの無防備、ド素人以前のレベル…。一体これは…）

その時、キルアの頭に数々のキーワードが過り、ハッとした。

（儀式、召喚、使い魔、それにあの鏡…！　念以外の何か！？　こいつの今の風も、明らかに念じゃない！　俺たちの知らない力？　でも、あるのか、そんなこと？）

キルアの表情が歪む、ゴンの警戒も強くなる。

それを見て、その男性は二人に言った。

「何をそんなに驚いておるのだ。魔法ぐらい知っているだろう？」

（（魔法…？））

二人の頭の中のワードが重なった。魔法使い？そんなものテレビだけの話である。

確かに、それに近いものなら自分たちも知っている、G・I（グリード・アイランド）、かつて二人がクリアしたゲームの名前である。だが、アレは念能力で全て説明がついたし、そもそもゲームのキャラであるため自我なんて持ち合わせていない。

急な言葉で信じられないのも無理はない。だが、魔法と解釈すれば全ての辻褄があう。

（色々考えねーといけねーけど、まずはこの場をどうにかしねぇとな…）

魔法についてはまだ分からないが、こういうのは相場で杖がなければ使えないと決まっている。先ほどの風の塊も杖を振り下ろした瞬間に発生した。

だが、問題はどんな魔法があるか分からない以上、迂闊に近づく事ができないと言う事だ。

そんなキルアにゴンは言った。

「キルア、さっきあいつ、杖振り下ろす前に何か呟いてたんだ」

「呟いてた…？　そうか！」

「うん。…多分だけど、それが呪文で、それを唱えないと魔法？は使えないんだと思う。呟いてたのが呪文って保証はまだないけど、でも…！」

「次また何か呟いたら、それはほぼ間違いなく呪文って事だ！」

それにも確証はないが、ほぼ間違いないと言ってもいい。試すだけの価値はある。

そして黒髪の男が二人に「もう終わりにしよう」と宣言すると、案の定、再び何かを呟きだした。

本当にか細い声だが、口の形だけで何か呟いている事は判断できる。

それと同時に、ゴンとキルアは真っ直ぐ突撃した。
その光景に絶句する男、かなり離れていた距離を、あっという間に縮められたのだ。
そして距離が詰められていると理解できたのと同時、自身の握っていた杖も奪い取られる。思考回路が追いついたのはそこまで、黒い髪の男、ギトーはキルアの手刀により意識を刈り取られた。
「見てキルア。コレ…」
ゴンは先ほどギトーから奪い取った杖をキルアに見せる。その杖にはなんら変わったところは見られなかった。
「やっぱり、魔法っていうの本当なのかな？」
「分かんね。でも、魔法って考えれば全部辻褄は合う。あの鏡の事から全部な」
「？　ていう事は、あのピンクの髪の子が召喚したって言ったのは…」
「もしそう解釈するなら、おそらく俺たちを魔法でここに呼びだしたんだ」
ちょうどその時、衛兵たちがこちらに近づいてくることに気づく。
二人は見つかる前にその場を離れた。

「とりあえず、あのピンクの髪の子に話を聞きにいこうよ」

「仕方ねぇよな。でもあいつ何時目ぇ覚ますか分かんないぜ。一応すげぇ手加減はしたけどさ。それにまた良くわかんねぇ儀式に付き合わされるかも…」

「そこら辺はちゃんと話しあえばいいよ」

「ったく、単純だな。お前」

そして二人はルイズのいる医務室に向かった。

Ｎｏ．３　魔法（後書き）

やっと次回でお話が進みそうです…

駄文で申し訳ありません。

ホント勢いだけで書いています…（（〇＝殴っ！

あと、自分は貴族が嫌いですが、この作品は別にアンチではありません！

次回もよろしくお願いします！

Ｎｏ．４　契約（前書き）

少し遅くなりましたｍ（＿　＿）ｍ

申し訳ありません！

しかもダラダラと長い駄文です！（（〇＝殴っ！

No. 4　契約

（アレ…ここは…）

トリステイン学院の医務室、そこで一人の桃色の髪をした少女が意識を取り戻した。彼女の名前はルイズ、ゴンとキルアをここに呼び出した張本人だ。

そしてルイズが起き上がると、彼女を心配する一人の男性の声が部屋に響いた。

「おお！　意識を取り戻しましたか、ミス・ヴァリエール！」

「ミスタ・コルベール…？」

その声の主はコルベール。ルイズは自分の置かれている状況の分析と、何があったのかを思い出そうとした。

（ここは…医務室…？　いったい何で、確か私は使い魔召喚の儀式をしていて…って！）

そこでハッとするルイズ。思考よりも先に口が動いた。

「ミスタ・コルベール！　私が召喚した使い魔たちは！？」

黒い髪の少年と、銀色の髪の少年。ルイズは自身が召喚した二人の平民の使い魔についてコルベールに問いかけた。春の使い魔召喚の儀式、この儀式は二度と執り行われる事のない神聖な儀式である。このまま契約出来なければ留年、いや最悪退学すらもあり得る。冷

静でいられるはずがなかった。

それをコルベールも分かっている。分かっているからこそ、答える事をためらった。

その顔を見て、ルイズの心は不安と恐怖で押しつぶされそうになる。そしてコルベールはルイズの問いに答えた。

「あの後、君の使い魔は脱走、そしてここトリステイン魔法学院に潜入。今、衛兵や教師が対処にあたっていますが、未だに捕えられておらず、逃走中だそうです」

告げられるその言葉、ルイズの心が不安と希望で揺れる。捕えられていないと言う事は、まだ捕まえるチャンスがあると言う事。その後契約すれば、退学や留年は免れる。ただ、教師が動いていて未だ逃亡し続けている、それは紛れもない事実である。もしここから遠くに逃げられれば、もう二度と見つからないかもしれない。そして、その二つの感情がルイズに与えたのは苛立ちと焦燥。ルイズはコルベールに叫んだ。

「ミスタ・コルベール！　今の状況詳しく説明してください！」

その張り上げた声に驚くコルベール。ルイズの心境を理解してか、コルベールは口を割らない。今のルイズに、衛兵は愚かスクエアクラスの教師すらも少年たちによって気絶させられたと告げれば、絶望しかねないだろう。事実上、彼らを捕える事が無理だと伝えているようなものなのだから。

ルイズはそれを理解していないが、答えないと言う事は何かある。苛立ちは大きくなっていった。

「そもそも…！　ミスタ・コルベールがあの時私の使い魔をちゃんと捕えておけば！　このような事にはならなかったんじゃないんですか！？」

「…ッ！　そ、それは……」

それは事実ではあるが、コルベールはルイズを医務室に運ぶ事と生徒たちを落ち着かせ安全を守る事を優先させた。ルイズも今の状況を考えれば十分理解できる。だが、この苛立ちをぶつける相手が他に居なかった。

ちょうどその時、ドゴンっ！と鍵の掛った部屋の扉が無理やり開けられる。その音に驚いたルイズとコルベールは、同時にドアの方へ視線を向ける。

そこにいたのは自分たちが今、探している張本人。ゴンとキルアがそこにいた。

「あんた達は…！」

ルイズがそう言うのと同時に顔色が少しだけ晴れる。もしかして契約をしてくれる気になったのか、そうじゃなくてもここにはコルベールがいる。希望が見えたのだ。

ルイズの反応に対し、コルベールは二人を捕えるために杖を構えて臨戦態勢に入ろうとする。だが、それよりも早く、キルアがコルベールの首に手刀を落とした。

「悪いね、おっちゃん」

その声がコルベールに届くよりも前にコルベールは気を失っていた。いきなりの事態に動揺するルイズ。コルベールはトリステインの教師であり、トライアングルクラスのメイジである。その彼がいきなり目の前で倒れたのだ。魔法が使えず、“ゼロのルイズ”と蔑まれてきた自分でどうにかなる相手ではない。

それでも、ルイズは恐怖に震える心を隠し、今出せる精一杯の威厳で杖を構えた。

それに対し、ゴンがルイズに言った。

「ちょっと待って！　俺たちただ話を聞きに来ただけなんだ」

「このおっちゃんも気絶させただけ、別に襲いに来たとかそう言うんじゃないから」

その言葉にルイズは呆気にとられたような表情を浮かべる。

いきなり目の前で人が倒れて、それをした本人たちは話がしたいだけだと言いだしたのだ。先ほどまでの緊張が一気に抜けていった。

「何よ、話って…？」

ルイズが尋ねる。話しがあるのはこっちの方であるため、ルイズにとっては願ってもないチャンスである。これが罠だと言う可能性もなくはないが、わざわざ罠にかける意味がないし、罠だからと言いってルイズにこの状況を抜け出せる術はない。ルイズは二人に準じることにした。

そしてゴンがルイズの言葉に答えた。

「まず、ここが一体どこなのか教えて？」

（？　ここが分からない…？）

トリステインに住む者なら、平民でもこの場所がどこかぐらいは分かる。ていう事はこの二人はトリステインの平民じゃないと言う事になる。

「アンタ達、一体どこの平民よ？」

「今質問してんのこっち」

（な、何様のつもりよ…！）

怒りでワナワナと震えるルイズ。しかし、状況が状況であるため、ルイズは怒鳴りたい気持ちを抑えてゴンの問いに答えた。

「ここはトリステイン魔法学院よ！」

ルイズの答えを聞いたゴンはキルアに尋ねた。

「キルア、聞いたことある？」

「ないね。そもそも魔法学院なんて知らないし」

「ちょっと、何言ってるのよ！　ハルケギニアに住む人なら誰でも知ってるわよ！？」

トリステイン魔法学院、それそのものを知らない可能性はあるが、その名前を知らないということはありえない。トリステインは小国とはいえ、ハルケギニアの代表的な国の一つである。それを知らないかのような反応を取る二人に、ルイズは不信感を募らせた。

だが、次の二人の言葉はルイズのその不信感を完全に吹き飛ばすほどの爆弾発言であった。

「ハルケギニアってどこか分かる？」

「俺も聞いたことがない」

「ちょっ！　はぁ！？　何よ！　からかってるの！？」

「からかうって言われても…」

「知らないもんは知らないからな」

（何言ってんの？　こいつら…）

ルイズは先ほど自らが『からかっている』と言ったが、心の中では二人が本心から発した言葉だと言う事は分かっていた。そもそも今自分をからかう必要がない。だからと言って二人の言動をいきなり信じろと言われても無理な話である。ハルケギアとはこの世界の名前、それを知らないのは絶対にありえないのだから。

それを確信にするため、ルイズは二人に言った。

「ハルケギニアはこの世界の名前よ」

（（？））

その言葉を聞いた二人は、俯いてヒソヒソと話しを始めた。

「ねぇ、キルア、一体…」

「分からない。こいつらにとっての地球の呼称がハルケギアなのかもしれないし、こいつ等にとっての世界がハルケギニアって場所のことかも知れない。でも、魔法ってあり得ない力。念とは違う何か。本当にここがハルケギニアっていう別の世界って考えれば、それも頷ける」

「G・Iみたいな感じとも違うしね」

その二人の反応を見てルイズは確信する。本当にこの二人はハルケギニアを知らない人間であると言う事を。

そしてゴンはルイズに尋ねた。

「ねぇ、ハルケギニアについて詳しく説明してくれない？」

「ウソでしょ、それ…」

ルイズが呆気にとられた声を上げる。ハルケギニアについて知らない理由、それはこの二人がハルケギニアとは別の世界から来たためだった。

「俺たちだって信じられねぇよ。でもここは地球じゃない。俺たちの世界に魔法なんて存在しないし、月も二つも存在しない」

それでもウソだと思いたいが、話しの辻褄は合う。納得せざるを得なかった。

「それでルイズ、俺たちを元の世界に戻す事は出来るの？」

「無理よ。異世界とこの世界をつなぐ魔法が存在するかどうかも分からないし」

「でも現に俺たちはこうしてここにいるだろう！？　使い魔の召喚か何かしんねぇけど！」

「そんな事行っても分からないの！　私だって呼び出したくて呼びだしたんじゃないんだから！」

ルイズは叫んだ。おそらくその言葉にウソはない。本当にゴンとキルアを元の世界に戻すすべをルイズは知らない。さすがにこの時は、ゴンもキルアも冷静にはいられなかった。

今すぐにもとの世界に戻る事ができないのもそうだが、何よりもとに世界に本当に戻れるかどうかすらわからないのだ。もし誰もそん

な魔法を知らなかったら、もし存在すらしていなかったら。完全に切羽詰まっていた。

ちょうどその時、二人はこの部屋に近づいてくる人の気配に気づく。そして振り向き扉の方に視線を向けた。

「誰か来るね」

「ああ、とりあえず。考えるのは後だ」

ルイズはその張り詰めた空気に緊張感を抱く。そしてその時間が数秒過ぎると、部屋の扉がゆっくりと開かれ、そこから一人の老人が姿を現した。

「オールド・オスマン！」

ルイズが叫んだ。

「この人」

「ああ、多分さっきの奴やこのおっちゃんよりも強い」

隙だらけで飄々とした老人、だがその老人が醸し出す雰囲気がゴンとキルアにそう判断させていた。

「ま、そう構えなさんな。ワシはお主らを捕えに来たわけではない。お主らと話しをしに来たのじゃ」

「話し？」

「お主らの会話は見ておった、だいたいの内容は分かっておる」

（気がつかなかった…）

（魔法か…）

「そこでじゃ。ちょっと交渉にのってくれんか？」

「交渉？」

ゴンがオスマンに尋ね返す。オスマンは髭を撫でながら、淡々と答えた。

「お主らにミス・ヴァリエールの使い魔になって欲しい」

「ちょっ、爺さんいきなり何言ってんだよ！」

「まだ話しの途中じゃ。……春の使い魔召喚の儀式は一生に一度のイベントじゃ。二度目はない。もしミス・ヴァリエールがお主らを使い魔にできんかったら、ワシら学院側としてはそれ相応の対処を取らねばならん。そうなれば学院の名誉にも傷がつくし、ミス・ヴァリエールの未来も閉ざされる。もしもお主らが使い魔になってくれるというのなら、ワシらもお主らが自分の世界に帰れるよう全面的に協力しよう。それにヴァリエール家はこのトリステイン屈指の貴族じゃ。思わぬ情報が入って来るかもしれん。悪い話じゃないと思うがの」

淡々と述べるオスマン。それに対し、キルアが言った。

「道理が通らないね。もし俺たちの帰れる方法を見つけて帰ったと

したら、俺たちは使い魔ってのじゃなくなるんじゃない？　そしたらコイツどうなんの？」

「使い魔との契約はちゃんと終えたんじゃ、問題はないぞ」

そう答えるオスマン。それから暫く考え、キルアはゴンに言った。

「ゴン、お前はどっちがいいと思う？　この話し蹴るにしたって、行くあてがあるわけじゃないし、だからと言ってこいつの下に着くのもごめんだけど…」

「…俺は使い魔になってもいいと思う。ここの人たちが手伝ってくれるみたいだし、行くあてがないのも確しか。それに俺たちが契約しなかったらルイズが何か処罰受けるんでしょ？　もとはと言えば、俺があの鏡に触ったのが悪いわけだし」

「はぁ、そうだよな…」

そんな二人の会話を見て、ルイズは心底疑問に思った。

（こいつ…絶対に変…）

呼び出しのはルイズの魔法、いくら自分の意志ではないとはいえ、悪いのはルイズである。にも関わらず、『それに俺たちが契約しなかったらルイズが何か処罰受けるんでしょ？』とゴンは言った。もう二度と帰る事が出来ないかもしれないのに、その原因を作った張本人の事を何故気遣えるのか、ルイズは理解できなかった。

そしてゴンの言葉を聞いたオスマンは二人に言った。

「決心してくれたかの？」

「うん。でも、使い魔だからって下につくってのはナシ。それでもいい？」

「ワシは一向に構わん。それはミス・ヴァリエールが了承する事じゃ」

オスマンがそう言う。それに対し、ルイズは答えた。

「私に選択肢ないじゃない…。退学よりはマシよ！」

ルイズがそう言う。それと同時に、ゴンが思い出したかのように言った。

「あ！　でも儀式って、あのキスする奴だよね？」

「ああ！　そうだよ！　俺ぜってーやだからな！」

「ちょ！　ここまできて何よ！　仕方ないでしょ！　それしかないんだから！」

そして言い合いになる三人を見て、オスマンが一度咳払いをする。

「仕方ないのぉ。ワシが別の方法で召喚の儀式を行ってやるわい」

「！？　そんな方法があるんですか！？」

「知らないのも無理はない。これはもうすでに失われた儀式の方法じゃからな」

「それならキスしなくてすむの？」
「心配無用じゃ…」
そしてオスマンは杖を構え、呪文を呟き始めた。
「イル・ウォータル・スレイプ・クラウディ」
そしてオスマンが杖を振ると、ゴンとキルアの頭を青白い雲が包んだ。
「何コレ！」
「本当にコレが儀式なのかよ！」
叫ぶ二人。そして同時に、強い睡魔が襲ってきた。
（な、これ…、まさか…）
（毒…？　ちが、魔法…）
そして二人は倒れ眠りに落ちた。
「あの、オールド・オスマン？　これってただの睡眠魔法ですよね？」
「そうじゃが？」
「儀式というのは…？」

「ウソじゃ。このままじゃ長引くと思うての」

「え、あ、はい。ありがとうございます」

ルイズは複雑な心境でオスマンにお礼を述べた。

「今のうちに契約を済ませるのじゃ。ミス・ヴァリエール」

起きたら契約はできないだろう。特にキルアの方は。今のうちに契約するのがベストではあるが、さすがに騙している感じで気が引けた。

そして一度首を振り、迷いを捨てる。何で私が平民ごときに気を使わなければいけないの、そう思いながら、ルイズは杖を振り上げた。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンタゴン。この者たちに祝福を与え、我の使い魔となせ」

そしてゴンの傍まで行き、両手で顔を持ちあげた。

そしてゆっくりと自らの唇をゴンの唇に重ねた。

顔を真っ赤にさせて、そのままキルアの所まで行く。

その時、ゴンの左手が光、ルーンが刻まれる。

（ん、アレは…？）

そのルーンを見てオスマンは不思議に思う。そして首を傾げた。

そしてルイズはキルアの顔を持ちあげると、ゴンと同じようにキスをした。

するとキルアの左手にも、ゴンと同じ文字が浮かび上がってきた。

（あの子にも同じルーンか…）

どこかで見た記憶のあるルーンを見て、オスマンは思いだそうとするが、それが何なのか思い出せない。

（気のせいか…、ワシも年かのぉ）

何はともあれ、こうしてゴンとキルアのハルケギニアの生活が幕を開けるのだった。

No．４　契約（後書き）

や、やっと契約できました（T＿T）

次回から本格的に原作に入っていくと思います！

これからもよろしくお願いします！（≧≦）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7051x/

使い魔がハンター！？

2011年11月9日08時13分発行